

ALPHONSE

堺 アルフォンス・ミュシャ館 [堺市立文化館]
ミュージアムニュース

MUCHA

MUSEUM *News*



「紡がれる、美と調和^{ハーモニー}。」

CONTENTS

展示報告 (2025年4月 - 2026年3月)

ミュシャ × 堺緞通

教育普及活動 / 作品貸出

作品紹介 / コラム

vol. **15**

ミュシャ 謎の絵画

会期：2025年4月20日(日)～2025年8月17日(日)



めぐりめぐる、
ワンシーン。

チェコを代表する芸術家、アルフォンス・ミュシャ(1860-1939)のバリ時代のフィナーレを飾る油彩画《クオ・ヴァディス》(1903-04年、1920年加筆)。縦横ともに2メートルを超える大画面には、古代ローマの邸宅で少女が大理石像に口づける小説のワンシーンが描かれています。背後から覗き見る人物は原作小説には登場しません。その正体や、このシーンが選ばれた理由など、本作にまつわる多くのことは、謎に包まれてきました。本展では、1979年に発見されるまで長らく行方不明だった《クオ・ヴァディス》の全貌を解き明かしました。また、この絵画に至るまでのミュシャの創作の軌跡を、代表的な版画作品をはじめ挿絵、素描、油彩、ジュエリーによってたどり、当館が誇る世界有数のミュシャコレクションの魅力を余すことなく紹介しました。さらに、堺市に伝わる絨毯の手織り技術「堺^{だんつう}緞通」で織られた、ほぼ実寸大のタペストリーを初公開。1910年のアメリカで絨毯の原画となるはずだった絵画の歴史に、新たな1ページを刻みました。

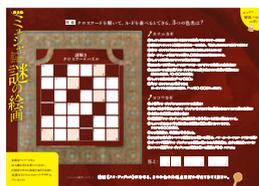
本展公式図録(74ページ)

豊富なミュシャ作品図版、学芸員によるコラム・分析・解説が満載!《クオ・ヴァディス》の1/10サイズの、世界で最も《クオ・ヴァディス》について詳しく書かれた図録です。



謎解き クロスワードパズル

展示室の解説パネルからクロスワードパズルのキーワードを探す謎解き体験をお楽しみいただけます。



関連イベント

ワークショップ 「ミニ^{だんつう}緞通を織ってみよう」

日時：4月27日(日)、6月15日(日) 13:30～
講師：堺市手織緞通技術保存協会、堺市博物館スタッフ

「堺^{だんつう}緞通のクオ・ヴァディス」の制作の際に染められた残糸をつかって、簡易器具を使用したミニ緞通の手織りワークショップを開催しました。



講演会「絵画《クオ・ヴァディス》の魅力」

日時：5月18日(日) 14:00～
講師：高原茉莉奈(本展担当学芸員)

本展の担当学芸員が《クオ・ヴァディス》に関する最新の調査内容や展覧会の見どころを語りました。



講演会「^{だんつう}緞通の歴史と ミュシャの新作緞通」

日時：8月3日(日) 14:00～
講師：堀川亜由美
(元堺市博物館学芸員/
現堺市役所文化観光局
歴史遺産活用部文化財課学芸員)

堺で江戸時代に始められた手織り技術、緞通。その歴史と現状を紹介し、ミュシャの新作緞通の意義をお話いただきました。



展示構成

本展ではミュシャが《クオ・ヴァディス》の創作に至るまでの軌跡を5つのパヴィリオンを通じてご紹介。堺市の伝統手織り技術、堺緞通で制作されたほぼ実寸大のタペストリー「クオ・ヴァディス」も初公開しました。

Pavilion I シーンとエピソード

Scenes and Episodes

初期の挿絵からサラ・ベルナール主演の演劇ポスターまで、「物語」を描いたミュシャの作品の数々が並びました。



アルフォンス・ミュシャ 書籍『白い象の伝説』(第16章)挿絵(下絵) 1893年 墨、紙 堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

Pavilion II 1900年パリ万国博覧会

Expo 1900 in Paris

「アール・ヌーヴォーの勝利」と称された125年前の壮麗なパリ万博。オーストリア館のためのポスターや彫刻、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ館のための壁画の下絵などを通して、ミュシャの当時の活躍を振り返りました。



アルフォンス・ミュシャ 《パリ万博オーストリア館》1899年 リトグラフ、紙 OGATAコレクション

Pavilion III 絵画の注文

Commissioning

ミュシャへの注文の多くは、空間を彩るための絵画でした。パリ時代の装飾パネルをはじめ、アメリカに拠点を移した後に受注制作した油絵画を紹介しました。



Pavilion IV クオ・ヴァディス — 絵画と絨毯

Quo Vadis: Painting to Rug

ミュシャの絵画《クオ・ヴァディス》を織る——1910年の幻の計画が、堺の伝統手織り技術「堺緞通」によってついに実現。115年の時を経て叶った夢。ふたつの傑作が並ぶ歴史的機会となりました。



Pavilion V ワンシーンの起源

The Origins of the Scene

「謎の絵画」の鍵を握るのは、1910年のパリで巻き起こった『クオ・ヴァディス』ブーム。原作小説やその挿絵、演劇の記録、そしてとある夜のイベントなどを手掛かりに、当時の流行の実態に迫りました。



アルフォンス・ミュシャ 《リジー》1901年 リトグラフ、紙 OGATAコレクション

ミュシャと夢二 STYLE of BEAUTY

会期：2025年8月23日(土)～11月30日(日)



ふたりが魅せる
美の様式

アルフォンス・ミュシャ(1860-1939)と竹久夢二(1884-1934)による、かつてないふたり展。彼らの芸術は、かたや19世紀末のヨーロッパにおいて、かたや20世紀初頭の日本において、ともに社会的な流行を生み出します。当時すでに「ミュシャスタイル」、「夢二式美人」と呼ばれたふたりの個性と表現は、市井の人々に愛され続け、現代においてもその人気は揺らぎのないものとなっています。国も時代も超えたふたりの人気は、「限られた人々だけでなく、広く親しまれるための芸術を作り出したい」というミュシャの願いが叶ったものであり、「芸術は生活の中で生まれ、生活とともにある」という夢二の想いに通じるものといえます。本展はふたりの作品を象徴するモチーフのひとつ「女性像」に焦点をあて、比較しながらそれぞれの美の表現と創作に迫りました。詩情あふれる夢二の作品と華麗なミュシャの作品が並び、響き合う空間は、両者の作品にまた新鮮な気持ちで出会う特別な機会となったのではないのでしょうか。(Y.H.)

本展公式図録(フルカラー18ページ)



夢二郷土美術館学芸員との共同執筆による本展ならではの公式図録。主要出品作品の紹介から、両者のスタイルを比較しつつ各々の魅力を深掘したコラムなども掲載。



見て、知って、味わおう 「むしやむしやミュシャ × まじまじ夢二」配布

子どもたちを中心に、はじめてのミュシャ館を楽しむシールラリー形式の鑑賞ツール。



関連イベント ミュシャと夢二 ふたりの作品を見て知って楽しもう 子どもからおとなまで楽しめるイベントを開催

両館学芸員によるスライドトーク

日時：9/21(日)14:00～
講師：井土真菜(夢二郷土美術館学芸員)、
原田悠里(本展担当学芸員)

両館学芸員がミュシャと夢二の魅力について語りました。



講演会

「Muchaの故郷チェコ♡
美しい楽しいチェコバナシ」

日時：9/23(火・祝)14:00～
講師：スザンカ・ハニヴァロヴァー
(在堺チェコ名誉領事館勤務・チェコ・オストラヴァ出身)

堺在住のチェコ人スザンカさんにより、チェコ文化の楽しいお話をお聞かせいただきました。





STYLE of BEAUTY 流行になった新しい美しさ

「ミュシャ・スタイル」「夢二式美人」と称され、時代をとらえ、新しい表現として人々を魅了したふたりの作品を紹介しました。なかでも似ているポーズ、題材、モチーフを描いた作品を並べることで、それぞれ独自のスタイルの特徴とともにふたりの共通性を発見していただけたのではないのでしょうか。



Pick up!

ミュシャが描いた演劇「椿姫」のポスターと夢二が描いたオペラ「椿姫」の楽譜の表紙絵を展示。表現の類似性と物語を想起させるふたりのそれぞれの表現に注目しました。



STYLE of BEAUTY ふたりが見つけた美の視点

本展ではふたりの女性像を、「日常」と「理想」という2つのキーワードで読み解き、女性の姿に込めたふたりの美のポイントを探りました。日常の何気ないしぐさの中に美を見つけた夢二と理想的な洗練されたポーズで魅せるミュシャの美の視点に注目しました。



竹久夢二《化粧》
昭和初期 絹本着色
夢二郷土美術館蔵



アルフォンソ・ミュシャ《月の輝き》
1898年 リトグラフ、紙
堺 アルフォンソ・ミュシャ館(堺市)蔵

ふたりの「女性像」を中心に
多彩な創作活動を紹介

ミュシャと夢二

展示構成

STYLE of BEAUTY 美しいもの 可愛いもの 不思議なもの

現在のグラフィック・デザイナーの先駆者的な存在として活躍したふたりのデザイン業を紹介。夢二が開店した日用品店「港屋 絵草紙店」のキャッチコピーにちなみ、「美しく可愛くて不思議」な作品の数々を巡りました。



STYLE of BEAUTY 郷愁と希望、美しきふるさとへの想い

ミュシャの祖国・チェコと夢二の故郷・岡山を題材にした作品から、チェコの少女、岡山の母と姉という比較も交え、それぞれのスタイルのルーツともいえる、ふたりのふるさとへの想いに迫りました。



夢二郷土美術館での 東の夢二と西のミュシャ STYLE of BEAUTY

夢二郷土美術館との連携展となった本展。2025年3月14日(金)～6月19日(木)に夢二郷土美術館で開催され、65点のミュシャ作品が岡山へ。当館とはまた異なる作品と展示構成でご覧いただきました(P.9参照)。対談形式のギャラリートークでは50名ほどの参加者にお楽しみいただきました!



トピック展示 — EXPO2025 大阪・関西万博開催記念

1900年開催のパリ万博で、ミュシャはデザイナーとして多方面で活躍します。そのひとつがボスニア・ヘルツェゴヴィナ館の壁画です。当館所蔵の貴重な下絵とフランスのオルセー美術館とチェコの国立プラハ美術工

芸博物館から借用した作品画像で制作したタペストリーによってボスニア・ヘルツェゴヴィナ館を再現。幻燈写真に映し出された1900年万博の情景も合わせてお楽しみいただきました。



ギャラリートーク 「みてくらべてミュシャと夢二、初めてのびじゅツアー」

日時：10/18(土)・11/23(日・祝) 14:00～

こども向け解説ツアー。こどもたちの気づきを聞きながら作品を見る楽しさを一緒に探しました。



ワークショップ 「学芸員のお仕事体験! ~解説を考えてみよう~」

日時：8/24日(日) 13:30～

お気に入りの作品を鑑賞者の視点から独自の解説をつけて、実際に展示。ひとつの作品に入り込んだような個々の独創的な視点での解説は他の来館者からも好評でした!



ワークショップ 「てづくり青写真でオリジナルカードをつくろう」

日時：9/14日(日)・10/4(土) 各日11:00～、14:00～

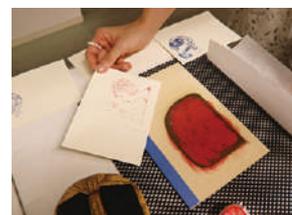
講師：若林久未来(古典写真作家)
ミュシャと夢二のモチーフを組み合わせカラージュエリー個性豊かなカードが完成しました!



ワークショップ 「ばれんで刷り刷りミュシャと夢二のモチーフ封筒づくり」

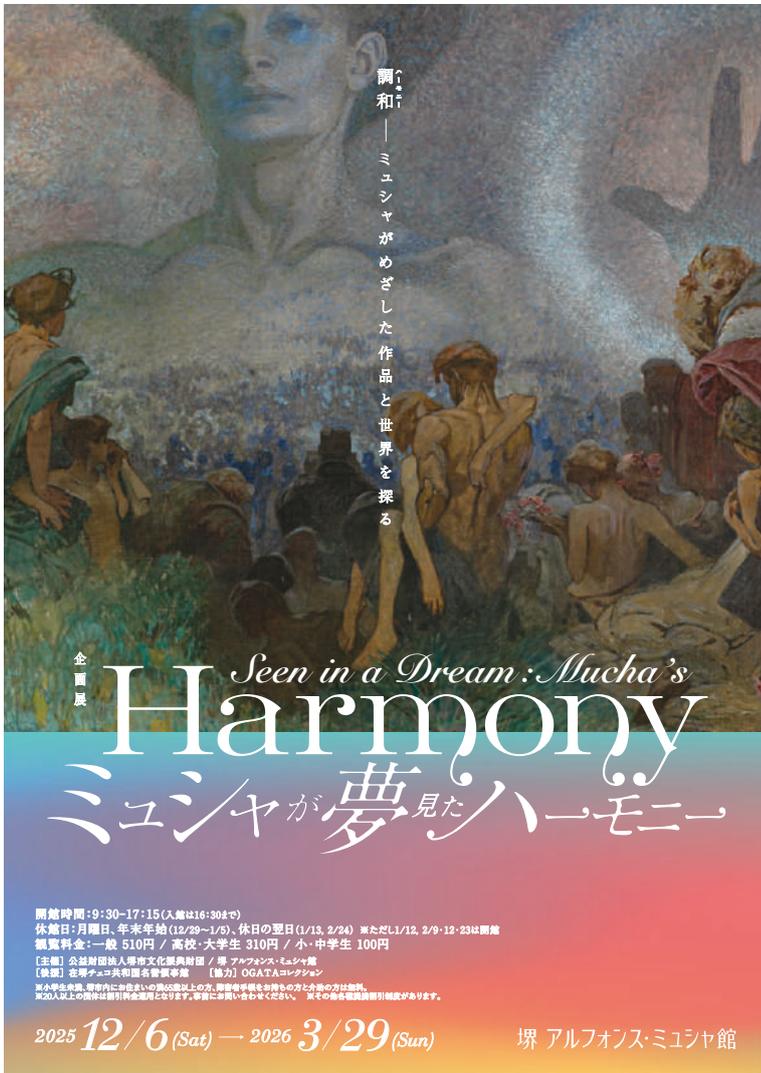
日時：8/30(土)・9/28(日)・10/12(日)・11/16(日) 各日13:30～

ミュシャと夢二の表現を石版(リトグラフ)と木版技法で楽しく体験しました。



ミュシャが夢見たハーモニー

会期：2025年12月6日(土)～2026年3月29日(日)



調和——
ミュシャがめざした
作品と世界を探る

概ね1900年代初頭までの前半生、ミュシャはパリで華やかな女性像を描いていましたが、後半生は活動拠点を祖国チェコに移し、芸術を通じて祖国愛を表現しました。近年はこうした作品の一部である《スラヴ叙事詩》をはじめ、大規模な絵画や公益を目的としたポスターなど、多様な作品を描いた芸術家として評価が高まっています。経済的な成功だけに満足しなかったミュシャは、たとえ商業的なポスターであっても広く民衆が楽しめる芸術をめざし、生涯にわたって人々の幸福を願い数多くの作品を描きました。本展は「調和」をキーワードとして、当館を代表する大型の油彩画《ハーモニー》を中心に、当館のコレクションから厳選した数々の作品に共通するモチーフや構図を読み解き、そしてミュシャが作品を通して人々に伝えようとしたメッセージや想いを探りました。ミュシャの芸術家としての新しい一面を見出す機会となったのではないのでしょうか。(Y.K.)

本展公式図録(72ページ)

当館の主要コレクションの一つ、大型油彩画《ハーモニー》に関する最新の研究結果を収録しました。



関連イベント

ミュシャのデザインカードを作ろう

日時：12月13日(土)、1月11日(日)、
2月23日(月・祝) 各日11:00～15:00

ミュシャのモチーフシールを貼ってオリジナルのポストカードを作りました。こどもからおとなまで幅広い年代の方にご参加いただきました。



学芸員によるスライドトーク

日時：12月27日(土)、1月17日(土)、
3月7日(土) 各日14:00～

講師：川口裕加子(本展担当学芸員)

本展担当学芸員が《ハーモニー》の関連作品など、豊富なスライドを使って、展覧会の見どころを解説しました。



学芸員による作品解説ツアー(2月)

本展担当学芸員が展示室で作品を見ながら、解説を行いました。



展示構成

ミュシャをめぐる「^{ハーモニー}調和」について5つの章でご紹介しました。

第1章 円のモチーフ

Circle motifs

ミュシャは円環のモチーフを用いて女性を女神のように神々しく表現しました。出世作のポスター《ジスモンダ》をはじめ、円は光輪として威厳や神性を与える装飾となり、ミュシャ独自のスタイルとして定着しました。さらに円のモチーフは象徴的な意味も帯び、キリスト教やフリーメーソンに関わる作品においても用いられました。のちに祖国チェコへ拠点を移すと、やがて円はスラヴ民族の団結や歴史を象徴するシンボルへと変化します。本章ではミュシャの生涯の作品における円のモチーフの変遷をたどりました。



①

第2章 めざす場所 —巨大な人物と向かい合う人々

Place to aspire to: A giant figure and the people looking up to him

ミュシャは11歳頃から教会の聖歌隊員を務め、絵画・信仰・音楽が結びついた環境で育ちました。宗教芸術は創作の原点であり、画家として本格的に活動する以前から聖人画を描き、生涯にわたり教会関連の作品を手がけました。1894年の《ポエジー》では、巨大な人物と祈る小さな人物を対峙させる構図を描き、以後この表現を繰り返し用いました。とりわけ宗教作品で多用され、書籍『主の祈り』の挿絵では、闇の中の人々を導く神的存在として光をもたらす巨大な人物が象徴的に描かれています。



②

第3章 色彩と構図の調和

Balance of color and composition

19世紀ヨーロッパでは、産業革命後の社会問題を背景に、理想社会をめざす概念として「調和」が重視されました。色彩理論家は科学理論を基に、赤と緑など色相環で向かい合う補色による色彩の調和を研究し、この考えは美術にも広がりました。同時代のパリで活躍した新印象主義のスーラやシニャックは補色を意識した表現を展開し、ミュシャもまた多くの作品で補色を用いました。彼のデザイン理論をまとめたとされる『アルフォンス・ミュシャ 美術講義』では、色彩・構図・線といった要素から画面全体に調和をもたらす美の理論を示しています。



③

第4章 ハーモニー

Harmony

書籍『主の祈り』の制作以降、宗教画家としても評価を高めたミュシャは、礼拝堂装飾の依頼を受け《百合の中の聖母》やステンドグラスのデザインとしての《ハーモニー》を制作しました。この計画は中止されましたが、1908年に劇場の舞台上部を飾る壁画のために再構成されたのが当館所蔵の油彩画《ハーモニー》です。本作では、ミュシャが宗教的な作品に用いた「巨大な人物と向かい合う人々」の構図や円のモチーフが用いられ、これまでミュシャが様々な作品で描いてきたモチーフや構図が引き継がれました。また、補色を含む全色相と人物配置の比率によって、対立要素のバランスがとれた「調和」の世界が表現されました。



④



第5章 みんなの、そしてスラヴのために

For the Slavic people and for everyone

ミュシャはパリ時代から、美術を通じて民衆に貢献することを志し、「民衆美術協会」などの団体に参加しました。ほぼ同時期に挿絵を描いた書籍『主の祈り』や《ハーモニー》もまた、広く人々に光をもたらす目的で制作されたと考えられる作品です。1900年代後半以降は汎スラヴ主義の影響のもと、チェコやスラヴ民族の独立と平和を願う制作へと重心を移し、《スラヴ叙事詩》をはじめ、愛国的ポスターや独立したばかりのチェコスロヴァキアの紙幣、切手のデザインなどを無償で手がけました。これらの作品からは、人類と世界の幸福を「調和」によって実現しようとするミュシャの姿勢がうかがえます。



⑤

①(サロン・デ・サン・ミュシャ作品展) 1897年 リトグラフ、紙 / ②『主の祈り』第2文「御名が崇められますように」 1899年 リトグラフ、紙(書籍) / ③(モナコ・モンテ・カルロ) 1897年 リトグラフ、紙 / ④《ハーモニー》 1908年 油彩、カンヴァス / ⑤(第8回ソコル祭) 1925年 リトグラフ、紙
※全てアルフォンス・ミュシャ作、堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

Quo Vadis meet

ミュシャ × 堺^{だん} 通^{つう} 緞

2021年始動

Beginning of the Project

ミュシャが初めて描いたポスター《ジスモンダ》と小説『クオ・ヴァデイス』が世に出た1895年、堺では手織りの絨毯「堺^{だん}通^{つう}緞」の生産量が年間117万畳となりピークに達しました。堺^{だん}通^{つう}緞の販路を欧米に広げた藤本莊太郎(1849-1902)は、当時国際的な文化都市として脚光を浴びていたシカゴで万博を視察し、市場調査を行いました。一方で、ミュシャの絵画《クオ・ヴァデイス》もシカゴに持ち込まれ、1910年に絨毯の原画となる計画があったことは興味深いことです。そして1910年のシカゴでは実現しなかった絨毯化計画を復活させるべく、《クオ・ヴァデイス》を所蔵する当館がある堺の伝統技術「堺^{だん}通^{つう}緞」で織ろうというプロジェクトを2021年に始動させました。制作を担ったのは、手織り技術を現在も受け継ぐ大阪刑務所です。

制作費を含むプロジェクト資金はクラウドファンディングで募り、

392名の方々から
5,221,000円のご支援をいただきました。



堺^{だん}通^{つう}緞で織られた「クオ・ヴァデイス」

「堺^{だん}通^{つう}緞のクオ・ヴァデイス」概要

原 画：《クオ・ヴァデイス》
サ イ ズ：2165×1950mm(15mm厚) ※原画の約90%大
重 量：約16kg ※計50kg以上の羊毛を使用
素 材：羊毛、木綿
使 用 色：110色以上 ※原画から色を抽出し、泉大津の工場で染色
目 数：約28万マス
織 手：2名
製織速度：1cm以下/日
製織期間：2022年1月～2024年10月 ※当初完成予定：2023年夏頃



s Sakai Dantsu

堺緞通とは？

1831年に真田紐の製造・販売を生業としていた糸屋(藤本)庄左衛門が、中国製絨毯や鍋島緞通を手本に創始しました。庄左衛門の孫・藤本莊太郎(1849-1902)は、1877年の第1回内国勲業博覧会に堺緞通を出品して名声を博すと、販路をアメリカやフランスへと広げました。1893年にはシカゴ万博を視察し、どのような図案が好まれているかの調査も行いました。堺商人らしく、時代のニーズに合わせて多様な商品展開を行ったことから、堺緞通は明治期のピークには90もの業者が工場を営む堺の花形産業となりました。戦後は機械織にシェアを奪われ、「最後の名人」といわれた辻林峯太郎(号：白峰、1905-1992)が残した手織りの技術は、現在、堺式手織緞通技術保存協会の伝承活動と、大阪刑務所での生産技術取得訓練によって守られています。2006年、「堺の手織緞通」は大阪府無形民俗文化財(民俗技術)に指定されました。



昭和初期頃 個人蔵

大阪刑務所と堺緞通

大阪刑務所(堺市)では、生産技術取得訓練に堺緞通の製織が取り入れられています。1994年の導入に際しては、堺式手織緞通技術保存協会の会員が技術を指導しました。現在は法務技官の指導のもと、常時4~5名ほどの受刑者が図面起こしから製織まで、一連の作業に従事しています。現在、堺緞通の受注生産を行っているのは大阪刑務所のみです。



堺緞通「仁徳天皇陵古墳」
2013年 羊毛、木綿 堺市蔵

「ミュシャ 謎の絵画」展終了後、堺緞通で織られた「クオ・ヴァディス」は制作を担当した刑務所のイベントでも公開されました。

(詳しくは本冊子表紙裏面を参照)

製織と制作過程

2022年1月より製織がスタートしました。しかし序盤の段階で、コロナウイルス感染症拡大の影響により、制作を行う工場の稼働が停止しました。再開後も、稼働が断続的となったため、2022年12月時点では下部装飾枠の製織(全体の約12%)にとどまりました。2023年に入ると、コロナ禍の収束とともに制作は軌道に乗り始めます。7月からは2人の織手が製織する範囲を、画面左右ではなく、装飾枠と絵画部分をそれぞれ担当する形に変更したため、制作スピードが格段に上がりました。2023年12月時点で、全体の約52%に到達し、2024年には、人物の上半身部分に着手しました。特に完成度が左右される「顔」の部分については注意深く制作を行いました。そして、2024年10月31日、ついに完成を迎えたのです。



5% 完成 2022/08/31

工場の稼働の長期停止により、この時点での合計稼働日数は40日間。9月1日から、制作再開となった。



48% 完成 2023/11/15

絵画部分の明るい色調は、色選びを行う織手の色彩感覚によるもの。



82% 完成 2024/06/26

すべての人物の顔部分が完成。上部左右のバラの円環に差しかかる。



100% 完成

2024年10月31日、すべての製織を終えた。翌日、上下の経糸を断ち切り、完成品は織機から下ろされた。

2025年 大阪・関西万博 ミュシャ×堺緞通プロジェクトで完成した緞通の「クオ・ヴァディス」は2025年の大阪・関西万博でも展示されました。

9月25日(木)
Craftsmanship Journey
堺の匠が織りなす、
ミュシャの世界

場所：大阪ヘルスケアパビリオン
リボーンステージ

アルフォンソ・ミュシャの作品をモチーフとした堺の伝統文化のワークショップや展示を通じて、堺に息づく伝統技の美しさを感じていただけのイベントが開催されました。



大阪ヘルスケアパビリオンでの展示の様子

10月12日(日)
堺の伝統産業と
コラボレーションした
ミュシャ作品等の展示イベント

場所：フランスパビリオン4階
イベントラウンジ

堺緞通や注染、堺刃物、自転車といった堺の伝統産業とのコラボレーション作品の展示をはじめ、ミュシャがバリエーションで活躍していた時代に描いたポスターのレプリカで会場が飾られました。



フランスパビリオンでの展示の様子

教育普及活動

ミュシャ館では教育普及活動の一環として学校施設へのアプローチを積極的に行っています。2025年度は堺市内の小学校を中心に、出前授業や団体来館を行いました。

出前授業

タブストーリーを用いた鑑賞を通じてミュシャ作品に親しんでもらいました。

本年度は近年の出前授業での経験を踏まえ、低学年、中学年、高学年ごとに授業プログラムを用意し、それをもとに各学校の要望とも調整しながら授業を行いました。



教育機関等での美術鑑賞をご検討のみなさま



ミュシャ館は、こどもたちの美術鑑賞を応援しています。

学校からの団体来館、出前授業やワークショップ他、図工・美術に関わる先生の研修会などお気軽にご相談ください。展示準備などの繁忙期を除きご対応させていただきます。

作品貸出

夢二郷土美術館

本館特別展「東の夢二と西のミュシャーSTYLE of BEAUTY」展
2025年3月14日(金)～6月19日(木)

竹久夢二(1884-1934)とアルフォンス・ミュシャ(1860-1939)は、激動の時代に独自の女性像で人気を博し、それぞれ「大正浪漫」と「アール・ヌーヴォー」を代表する画家となりました。ふたりは遠く離れた地で活躍しながら、挿絵画家から出発し、デザイナーとしても才能を発揮するなど多くの共通点を持ちます。本展では、ふたりが描いた女性像に焦点を当て、表現の違いや作品に込めた想いを比較しながら紹介されました。当館からはポスター《モエ・エ・シャンドン》2点(p.10参照)をはじめ、全65点の作品を貸し出しました。日本とヨーロッパの、かつてないふたりの美のスタイルが響き合う展示が評判を呼びました。



いずみしくぼそう 和泉市久保惣記念美術館

特別展「Over The Waves -南蛮・万博・ジャポニスム-」
2025年9月7日(日)～11月3日(月・祝)

大阪・関西万博開催を記念し、日本とヨーロッパの相互の影響をたどった展覧会。南蛮文化や鎖国下におけるヨーロッパ文化への興味、また萬屋重三郎の時代を経て、北斎の浮世絵が第2回パリ万博で注目され、モネやロートレックらを魅了したジャポニスムの広がりまで、当時の様相が美術作品や資料で紹介されました。1900年パリ万国博覧会で多彩な活躍をしたミュシャ。当館からはミュシャのデザインを用いた《パリの象徴：絵皿》とリトグラフ《通り過ぎる風が若さを奪い去る》の2点を貸し出しました。



アルフォンス・ミュシャ 《パリの象徴：絵皿》
1897年 陶器
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵



作品介绍

シャンパン・ホワイトスター：モエ・エ・シャンドン ドライ・アンペリアル：モエ・エ・シャンドン

創業280年を超える世界的シャンパン・ワイナリー、モエ・エ・シャンドンのために制作された商品ポスター。ぶどうの葉を頭に飾るふたりの女性は、口当たりの異なるシャンパンの味を表現しているのだろう。やわらかな風をまとい、ぶどうを手に微笑む女性と、異国情緒あふれる衣装から差し出されるきらびやかな盃を手にする女性。身体をS字の曲線で表現し、対のように描いている。平面的なフレームと円形の装飾の中に、写実的な人物像を配置しつつ、足元はこちらに飛び出してくるような画面の空間構成は、商業ポスターでミュシャがよく用いる手法である。さ

らに「ホワイトスター」(図左)では、ぶどうの枝が持つ造形を生かした身体の曲線と重なるような動的な表現、「ドライ・アンペリアル」(図右)では布が無造作に折り重なり、重量感のあるドレープの静的な表現で印象付けている。

「ホワイトスター」は今日でも販売されているロングセラー商品、127年前のミュシャのポスターに思いを馳せながら、食卓に一杯添えてもいいかもしれない。(Y. H.)

ポスターにつられて、
ついどちらも買って
しまいそうです。



アルフォンス・ミュシャ
左：《シャンパン・ホワイトスター：モエ・エ・シャンドン》
右：《ドライ・アンペリアル：モエ・エ・シャンドン》
1899年 リトグラフ、紙
各671×297mm

岩に座る裸婦

この小さなブロンズ像は2025年大阪・関西万博のチェコパヴィリオンで同型の作品が出品されたが、1900年パリ万博当時ではパヴィリオン「人類館」の装飾として構想されたものの、その計画は幻に終わり日の目を見ることはできなかった。また、顔貌表現も臍気で、髪もきっちりと頭頂部にまとめた飾り気のない姿は、同時期に制作された典型的アール・ヌーヴォー様式の彫刻《ラ・ナチュール》(下記コラム図上参照)と比較すると一見「ミュシャらしくない」印象を受ける。ミュシャは1900年前後に彫刻家オーギュスト・ロダンとの交友関係があり、その影響がより強い作品といわれている。また、この「お団子頭で岩

に座る少女」という題材は、ミュシャの友人であるチェコ人画家、フランティシェク・クプカも近い時期に《波》(1902年、オストラヴァ美術館蔵)という水彩作品で描いている。ミュシャとクプカも友人同士で、それぞれ作風は異なるものの、どちらも目には見えない、象徴主義的な題材を好んだことからお互いの作品に影響を受けている可能性は少なくないのではないだろうか。(N.F.)



地味だけど…実はミュシャ
の交友関係の交差点と
いえる作品かもしれません



アルフォンス・ミュシャ
《岩に座る裸婦》1899年
ブロンズ、高さ270×φ150mm

コラム

ミュシャと万博

2025年の大阪・関西万博は盛況を博し、本万博においてもミュシャに関連する展示が行われたが、実は125年前に開催された1900年のパリ万国博覧会においてもミュシャは大活躍した。その多くは、ポスター、メニュー、ジュエリー、タペストリーなどのデザインというパリの売れっ子デザイナーを象徴する仕事であった。しかし、彼の活躍はそれだけではない。よく知られているのは、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ館の壁画である。本作でミュシャは初めて大規模な歴史画を手がけた。また実現はされなかったがパヴィリオン「人類館」の建築デザインも行い、さらに宝石商フーケと協力してジュエリー・デザインや彫刻《ラ・ナチュール》も手がけた。オーストリア館で展示された書籍『主の祈り』はキリスト教

の教えに基づき、人々に希望を与えるための書籍として制作された(p.6参照)。

アール・ヌーヴォー芸術が最盛期を迎えたパリ万博。ミュシャの多種多様な活躍ぶりは、アール・ヌーヴォーの芸術家としてのミュシャの人氣がいかにパリで根付いていたかを示す。そして同時に壁画やパヴィリオンの構想など、初めて大規模な作品に取り組むことになった。このような後の大連作《スラヴ叙事詩》につながる試みや商業画家にとどまらない姿勢からは、この当時ミュシャが芸術家としてめざしていた方向性が垣間見える。(Y.K.)

1900年パリ万博でも
大活躍のミュシャでした！



アルフォンス・ミュシャ
《ラ・ナチュール》1899年
ブロンズ、アメジスト
高さ683×φ288mm



アルフォンス・ミュシャ
《1900年パリ万国博覧会 ポスニア・ヘルツェゴヴィナ館壁画〈下絵〉》
1899-1900年 墨、紙 1402×3160mm

トピック



チェコフェスティバル2025 in 関西の展示風景



第36回関西矯正展の展示風景

堺緞通「クオ・ヴァディス」の展示

クラウドファンディングプロジェクト「ミュシャ×^{だんつう}堺緞通」で制作したタペストリーは下記イベントでも展示され、多くの方に見ていただく機会となりました。

2025年10月24日(金)～26日(日) チェコフェスティバル2025 in 関西(堺市市民交流広場 Minaさかい)

2025年11月8日(土)～9日(日) 第36回関西矯正展(大阪刑務所)

2025年12月6日(土)～7日(日) 第65回全国矯正展(東京国際フォーラム)

【表紙作品】

《クオ・ヴァディス》1903-04年、油彩、カンヴァス
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

執筆・編集 川口裕加子(Y.K.)、藤本奈緒(N.F.)、原田悠里(Y.H.)
発行 公益財団法人堺市文化振興財団 堺 アルフォンス・ミュシャ館
デザイン・制作・印刷 株式会社大伸社
発行日 2026年3月24日

堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市立文化館)

開館時間 9時30分～17時15分(入館は16時30分まで)
休館日 月曜日(休日や休日の間の場合開館、翌平日休館)、
休日の翌日(翌日が土・日の場合は開館)、年末年始、展示替期間
観覧料 詳しくは公式ウェブサイトをご参照ください。
アクセス JR阪和線堺市駅下車徒歩約3分
JR快速にて・大阪駅から約25分・天王寺駅から約10分
和歌山駅から約60分・関西国際空港から約40分



<https://muchasakai-bunshin.com>

590-0014
大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマージュ堺武番館
TEL 072-222-5533 FAX 072-222-6833

